

家庭での環境・生活と子どもの学力

浜野 隆（お茶の水女子大学大学院・准教授）

要約

- ◇本章では、保護者対象の調査、子ども対象の調査結果から、家庭環境、家庭での生活、親の意識や行動と子どもの学力との関係を調べた。そして、特に学力と高い関係のある変数について、階層差があるかどうかを調べた。
- ◇保護者対象調査からわかった家庭の文化的環境や子どもへの知的な働きかけ、保護者の普段の行動は、学力と強い関係がある。また、それらの変数は、親の学歴と強い関係がある。
- ◇子どもの家庭での学習日数や時間、学校外学習の利用、学習方法、家庭での環境や生活、親との会話は、学力と強い関係がある。
- ◇階層変数を統制しても、親の働きかけや子どもの学習行動は学力に影響しているが、学力を規定している要因は、教科、地域によって異なる。

1. はじめに

本章では、家庭での環境・生活（家庭の社会階層や文化環境、親の子どもに対する接し方や親の行動、家庭での子どもの生活習慣・時間の過ごし方などもすべて含む）と子どもの学力の関係について調査結果に基づき、検討することにする。

家庭環境と子どもの学力が関係していることは、これまでも多くの研究が指摘してきた。また、家庭の社会経済的背景と子どもの学力との間に密接な関係があることも、近年の国際学力調査の分析などからも、もはや国際的な常識といってよい。かつて、先進国では学力に対する家庭的背景の影響が強いのに対し、開発途上国では学校要因が学力に強く影響していると論じられたこともあった (Heyneman

& Loxley 1983) が、近年の研究では開発途上国における家庭背景の影響力も決して弱くはないことが実証されている (Nonoyama-Tarumi 2008)。

そこで、問題とされなければならないのは、家庭環境のどのような側面が、学力に影響しているのか、その詳細を分析することである。今回の調査では、家庭での子どもの生活や親の行動について、かなり詳しく調査している。また、一般的に日本では親の学歴・職業や世帯収入といった階層データをダイレクトにたずねることは困難であり、これまでは代理指標が用いられることが多かった。しかし、今回の調査では階層データが明確に得られている。そのため、階層→家庭環境や生活→学力の関係をより明確に分析することができる。

■ 2. 家庭環境・生活と子どもの学力

1) 「親の子どもへの接し方」「親の教育意識」と学力の関係

表2-1は、親の子どもへの接し方や教育意識と子どもの学力との関係を見たものである。子どもの学力水準別に、親の子どもへの接し方や教育意識を見ている。これを見ると、国語、算数とも、「家には本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある」「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「博物館や美術館に連れて行く」「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」「毎日子どもに朝食を食べさせている」「ニュースや新聞記事について子どもと話す」「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」などの項目でA層とD層との間に大きな差があることがわかる。国語、算数とも最もA層とD層で差が大きかったのは「家には本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある」である。国語につ

いて見ると、「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」が次いで大きく、以下「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」「博物館や美術館に連れて行く」となっている。一方、算数についてもほぼ同じ傾向であるが、算数よりも国語のほうが差（A-D）が大きい項目が多い。算数のほうが差が大きい項目としては、「子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している」「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」などである。教育意識については、D層の親のほうが「以前のように、土曜日も授業をしてほしい」と考える傾向にあることがわかった。

また、巻末の基礎集計表（保護者アンケート）から、A層の親は子どもに高い成績や学歴を期待しており、子どもが将来「よい学校や会社へ行くこと」「自分の能力や長所を生かすこと」を期待していることがわかる（資料編 p.155参照）。

表2-1 保護者の子どもへの働きかけと子どもの学力の関係

(%)

「とても」と「まあ」の合計	国語			算数		
	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)
子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	80.9	63.0	17.9	79.1	67.4	11.7
博物館や美術館に連れて行く	37.9	22.0	15.9	34.4	20.7	13.7
ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という	51.2	56.9	-5.7	49.5	56.8	-7.3
毎日子どもに朝食を食べさせている 注1)	93.2	82.8	10.4	91.0	81.8	9.2
子どもの勉強をみて教えている	59.7	58.8	0.9	57.4	58.5	-1.1
子どもに一日の出来事を聞く	87.1	86.0	1.1	88.6	86.1	2.5
子どもを決まった時間に寝かすようにしている	85.3	78.9	6.4	83.3	79.0	4.3
ニュースや新聞記事について子どもと話す	75.6	64.8	10.8	73.3	63.8	9.5
家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある	72.6	48.0	24.6	67.3	52.4	14.9
子どもがいつもお手伝いをする家事がある	58.5	60.1	-1.6	58.2	59.1	-0.9
テレビゲームで遊ぶ時間は限定している	63.4	55.3	8.1	62.3	53.0	9.3
（「テレビゲームは持っていない」と回答した割合）	9.9	4.0	5.9	9.0	4.2	4.8
子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している	57.7	40.2	17.5	55.4	41.6	13.8
子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している	86.3	81.1	5.2	88.4	79.0	9.4
以前のように、土曜日も学校で授業をしてほしい	59.3	66.4	-7.1	59.8	65.3	-5.5

注1) 「とてもあてはまる」のみ。

注2) 差（A-D）の数値はポイント差を示す。

注3) 網かけは、国語、算数とも8ポイント以上の差があることを示す。

2) 親の普段の行動と子どもの学力

表2-2は、親自身の普段の行動と子どもの学力との関係を見たものである。子どもの学力水準別に、親の普段の行動を見ている。これを見ると、国語、算数とも、A層の親のほうが「本（雑誌や漫画を除く）を読む」「テレビのニュース番組を見る」「新聞の政治経済欄を読む」「クラシック音楽のコンサートへ行く」「美術館や美術の展覧会へ行く」「政治経済や社会問題に関する情報をインターネットでチェックする」「パソコンでメールをする」などの傾向にあり、一方、D層の親のほうが「テレビのワイドショーやバラエティ番組を見る」「スポーツ新聞や女性週刊誌を読む」「パチンコ・競馬・競輪に行く」「カラオケに行く」などの傾向があることがわかる。

「携帯電話でゲームをする」に関しては、「まったくしない」という回答に注目すると、A層とD層で大きな差が見られる（国語：A層80.3%、D層70.8%、算数：A層77.6%、D層69.3%）。また、学校とのかかわりについては、A層の親のほうが「学校での行事（体育祭・学芸会など）に参加」する傾向がある。

A層とD層との間で最も大きな差が見られたのは、国語では「美術館や美術の展覧会へ行く」（14.1ポイント差）であり、次いで「新聞の政治経済欄を読む」（13.8ポイント差）、「本（雑誌や漫画を除く）を読む」（13.7ポイント差）、となっている。算数では「本（雑誌や漫画を除く）を読む」（12.0ポイント差）が最も大きい。

表2-2 保護者の普段の行動と子どもの学力の関係

「よくする」と「時々する」の合計	国語			算数		
	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)
本（雑誌や漫画を除く）を読む	70.6	56.9	13.7	69.6	57.6	12.0
携帯電話でゲームをする	7.3	9.4	-2.1	7.4	10.1	-2.7
テレビのニュース番組を見る 注1)	74.1	66.3	7.8	72.5	65.1	7.4
テレビのワイドショーやバラエティ番組を見る 注1)	25.0	35.0	-10.0	25.6	35.1	-9.5
新聞の政治経済欄を読む	60.2	46.4	13.8	55.9	48.4	7.5
スポーツ新聞や女性週刊誌を読む	18.0	28.6	-10.6	21.0	27.6	-6.6
パチンコ・競馬・競輪に行く	1.7	5.7	-4.0	2.8	5.9	-3.1
家で手作りのお菓子をつくる	53.4	45.3	8.1	47.3	45.6	1.7
クラシック音楽のコンサートへ行く	18.2	9.0	9.2	15.3	9.0	6.3
美術館や美術の展覧会へ行く	31.9	17.8	14.1	27.1	17.9	9.2
カラオケに行く	13.5	20.4	-6.9	16.5	23.1	-6.6
政治経済や社会問題に関する情報をインターネットでチェックする	31.2	24.4	6.8	29.2	23.8	5.4
パソコンでメールをする	35.6	23.8	11.8	31.7	26.4	5.3
学校での行事（体育祭・学芸会など）に参加（「ひんばんにした」の割合）	81.4	74.1	7.3	82.2	72.0	10.2

注1) 「よくする」のみ。

注2) 差(A-D)の数値はポイント差を示す。

注3) 網かけは、国語、算数とも8ポイント以上の差があることを示す。

3) 社会階層と親の意識・行動の関係

上記のように、親の意識や行動は、多くの項目において子どもの学力と強い関係が見られる。そこで次に、これらの項目と社会階層との関係について見てみたい。本調査においては、保護者票の約9割は母親が回答しているので、ここでは、階層の指標として母学歴をとって見てみることにする。表2-3は、学力と強い関係のあった項目と母学歴との関係を見たものである。これを見ると、いずれの項目も母学歴との関係が強いことがわかる。特に学歴による差が大きく見られたのは、「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「博物館や美術館に連れて行く」「家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある」「本（雑誌や漫画を除く）を読む」「美術

館や美術の展覧会へ行く」「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」などの項目である。すなわち、本や読み聞かせといった「文字・読書習慣との親和性」と美術館や博物館などの「芸術や外国文化への志向性」が階層と密接に関係していることがわかる。

「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」に関しては、「持っていない」という回答も加え、母学歴との関係を見た。その結果、中卒・高卒で21.6%、大学・大学院卒で42.6%と、高学歴の母親ほどテレビゲームを制限している傾向が明らかになった。

表2-3 保護者の学歴と教育意識・行動の関係

		母学歴		
		中卒・高卒	専門学校・短大卒	大学・大学院卒
子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	「とてもあてはまる」	18.7	29.4	41.7
博物館や美術館に連れて行く	「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」	21.3	30.4	52.1
毎日子どもに朝食を食べさせている	「とてもあてはまる」	85.0	90.0	92.9
ニュースや新聞記事について子どもと話す	「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」	65.4	73.0	77.9
家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある	「とてもあてはまる」	15.7	21.9	42.3
テレビゲームで遊ぶ時間は限定している	「とてもあてはまる」 + 「持っていない」	21.6	29.9	42.6
本（雑誌や漫画を除く）を読む	「よくする」	15.5	24.4	45.7
テレビのワイドショーやバラエティ番組を見る	「よくする」	37.1	27.3	20.9
美術館や美術の展覧会へ行く	「よくする」 + 「時々する」	13.8	25.8	45.7
子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している	「とてもそう思う」 + 「まあそう思う」	40.1	53.2	66.0

4) 児童の家庭での学習・生活習慣と学力

表2-4は、家庭での子どもの時間の過ごし方と学力（正答率）との関係を見たものである。まず、家での学習時間について見ると、学習時間が長いほど国語、算数とも正答率が高くなっていることがわかる。また、テレビの視聴時間については、国語、算数とも「ほとんど見ない」で最も正答率が高くなっている。国語、算数とも概ねテレビの視聴時間が長くなればなるほど正答率は下がる傾向にあるが、「30分くらい」から「2時間くらい」までの間ではあまり差が見られない。テレビゲームについても、テレビと同様に、接する時間が長くなればなるほど正答率は下がる傾向が見られる。特に、「3時間以上」テレビゲームをしている子どもは正答率が低くなっている（国語50.8%、算数47.0%）。「パソコンでインターネットをする」については、「1時間くらい」までであれば、ほとんど正答率に差は見られないが、2時間以上している子どもはそれ以下に比べやや正答率が低くなる傾向がある。

上記のように、家庭での学習時間と学力の間には強い関係が見られるが、次に学習の内容についても具体的に見ておこう。表2-5は、学力水準別に家庭での勉強の内容につい

て集計したものである。いずれの項目もA層のほうが「している」（「よくしている」＋「ときどきしている」の%、以下同）と回答した割合が高いが、A層とD層の間に大きな差が見られた項目がいくつかある。「学校の宿題をする」について「よくしている」という回答に着目してみると、国語、算数とも19ポイント以上の差があり、A層のほうが宿題を常にやっている（必ずやっけて行く）傾向があることがわかる。宿題以外では「わからない言葉が出てきたときは辞書を使う」「勉強の内容を自分なりにわかりやすくノートにまとめている」「（宿題以外の）プリントや問題集で勉強している」「苦しい教科もわかるまで勉強する」「先生や親に言われなくても勉強する」などである。「わからない言葉が出てきたときは辞書を使う」は特に国語において、また、「（宿題以外の）プリントや問題集で勉強している」は特に算数において差が大きい。

次に、基本的な生活習慣や普段の行動と学力との関係を見てみよう。表2-6の集計結果からは、「朝食を食べる」「学校に持っていくものを前日に確かめている」「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」「毎日、同じくらいの時刻に起きている」などの基本的な生活習慣は、いずれも学力と強い関係があることがわ

表2-4 家庭での子どもの時間の過ごし方と学力の関係

		(%)						
		ほとんど見ない、見ない	30分くらい	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	3時間以上	家にはない、もっていない
家で勉強する	国語正答率	54.4	57.1	61.5	65.2	69.9	74.1	—
	算数正答率	50.8	53.7	57.7	60.2	63.4	65.2	—
テレビを見る	国語正答率	69.7	62.8	62.2	61.4	58.6	57.5	63.9
	算数正答率	61.1	56.6	57.9	57.4	56.2	53.7	62.5
テレビゲームをする	国語正答率	64.4	61.9	59.9	57.7	57.6	50.8	63.6
	算数正答率	59.1	58.1	57.2	53.1	52.7	47.0	57.9
パソコンでインターネットをする	国語正答率	61.8	61.8	61.8	59.0	56.6	59.7	56.4
	算数正答率	58.3	57.3	58.2	50.3	56.1	54.8	52.5

かる。D層はA層に比べこれらいずれの項目でも「よくしている」という回答が少ない。

普段の行動については、「(マンガ以外の)本を読む」は、国語、算数いずれの教科においても学力との関係が強いが、特に国語と強

い相関を持っていることがわかる。また、「新聞のニュース欄を読む」「インターネットで調べものをする」「美術館や博物館へ行く」なども学力との関係は確認されるが、教科によって傾向に違いは見られない。

表2-5 家庭での子どもの学習内容と学力の関係

「よくしている」と「ときどきしている」の合計	国語			算数		
	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)
学校の宿題をする	98.7	90.9	7.8	98.2	90.8	7.4
学校の宿題をする（「よくしている」のみ）	88.9	69.7	19.2	87.1	67.6	19.5
自分の興味のあることについて調べたり、勉強したりしている	64.5	56.2	8.3	63.7	57.9	5.8
テストでできなかったところをわかるまで見直す	65.2	52.7	12.5	64.5	54.2	10.3
わからない言葉が出てきたときは辞書を使う	76.8	55.1	21.7	70.7	55.6	15.1
(宿題以外で)教科書を読んでいる	47.4	40.6	6.8	47.0	41.4	5.6
勉強の内容を自分なりにわかりやすくノートにまとめている	68.3	53.5	14.8	67.3	54.9	12.4
(宿題以外の)プリントや問題集で勉強している	63.3	49.8	13.5	62.8	47.1	15.7
苦手な教科もわかるまで勉強する	59.8	41.5	18.3	59.2	39.7	19.5
得意な教科や興味のある分野を集中して勉強する	75.6	68.5	7.1	77.4	68.6	8.8
先生や親に言われなくても勉強する	77.6	64.3	13.3	76.1	62.5	13.6
勉強する時間を自分で決めて実行している	56.4	49.8	6.6	55.8	50.0	5.8

注) 差(A-D)の数値はポイント差を示す。

表2-6 家庭での子どもの生活習慣・行動と学力の関係

		国語			算数		
		A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)
朝食を食べる	「よくしている」	96.2	90.7	5.5	95.4	89.9	5.5
学校に持っていくものを前日に確かめている	「よくしている」	66.9	54.8	12.1	66.5	54.2	12.3
毎日、同じくらいの時刻に寝ている	「よくしている」	46.4	36.6	9.8	48.1	36.9	11.2
毎日、同じくらいの時刻に起きている	「よくしている」	72.7	59.8	12.9	73.3	59.4	13.9
(マンガ以外の)本を読む	「よくする」+「ときどきする」	84.4	64.5	19.9	79.4	66.0	13.4
美術館や博物館に行く	「よくする」+「ときどきする」	24.7	19.5	5.2	24.6	18.3	6.3
新聞のニュース欄を読む	「よくする」+「ときどきする」	56.4	45.8	10.6	53.7	44.1	9.6
インターネットで調べものをする	「よくする」+「ときどきする」	56.6	46.8	9.8	56.5	47.0	9.5

注) 差(A-D)の数値はポイント差を示す。

■ 3. 多変量解析による総合的分析

1) 本章で用いる階層変数について

① 階層指標へのスコア割り当て

次に、多変量解析（ここでは重回帰分析）を用いて、国語学力、算数学力の規定要因を分析する。はじめに、回帰分析で用いる階層変数について、以下の表2-7（親の学歴）、表2-8（父親の職業）、表2-9（家族全体の世帯収入）のようにスコアを割り当てた。

なお、保護者アンケートでは、子どもに対してどの程度の学歴を期待するかを、児童対

象アンケートでは、「将来どの学校まで進みたいと思っているか」をたずねているが、上記の学歴スコアとほぼ同様に、「中学校」に1点、「高等学校」に2点、「専門学校・各種学校・短期大学・高等専門学校」に3点、「大学・大学院」に4点を与えた。

② 階層指標、学校外教育費支出、学力の相互関係

これらの階層指標、学力テスト結果（ここでは、国語、算数とも全設問の通過率を用いている）、学校外教育費支出の相関係数を見

表2-7 親の学歴

	父学歴 (%)	母学歴 (%)	スコア
小学校・中学校	3.8	1.9	1
高等学校	38.9	43.1	2
専門学校・各種学校・短期大学・高等専門学校	15.9	41.6	3
大学・大学院	41.3	13.4	4
合計	100.0	100.0	

表2-8 父親の職業

	%	スコア
技能職・労務・運輸、農林漁業、保安・サービス	37.1	1
販売的職業、事務的職業	22.3	2
管理的職業、専門的職業	40.6	3
合計	100.0	

表2-9 家族全体の世帯収入（税込年収）

	%	スコア
200万円未満	4.7	1
200万円以上～300万円未満	5.9	2
300万円以上～400万円未満	9.9	3
400万円以上～500万円未満	12.1	4
500万円以上～600万円未満	14.2	5
600万円以上～700万円未満	11.8	6
700万円以上～800万円未満	11.9	7
800万円以上～900万円未満	6.9	8
900万円以上～1,000万円未満	6.9	9
1,000万円以上～1,200万円未満	8.7	10
1,200万円以上～1,500万円未満	3.9	11
1,500万円以上	3.2	12
合計	100.0	

たのが、表2-10である。これを見ると、母学歴と父学歴、父学歴と父職業、父職業と世帯収入、世帯収入と学校外教育支出の相関が高くなっていることがわかる。

次に、国語学力、算数学力との相関を見ると、国語学力と最も相関が高い家庭環境変数は学校外教育支出であり、次いで、父学歴、母学歴となっている。一方、算数学力と最も相関が高いのは母学歴であり、次いで、父学歴が高い。

③ 重回帰分析の結果

母学歴、父職業、学校外教育支出を独立変数、国語学力、算数学力を従属変数として重回帰分析を行った(表2-11、12)。これを見ると、いずれの独立変数も、国語、算数の学力に対して有意な影響を及ぼしていることがわかる。標準化係数をみると、国語、算数とも、父職業に比べ母学歴、学校外教育支出のほうが高い値となっている。決定係数(調整済みR²乗値)を見ると、国語は0.112、算数は0.071と国語のほうが高い。

表2-10 階層指標、学校外教育費支出、学力の関係

	父学歴	父職業	世帯収入	学校外教育支出	国語学力	算数学力
母学歴	0.447	0.320	0.376	0.324	0.277	0.234
父学歴		0.467	0.375	0.319	0.279	0.225
父職業			0.429	0.310	0.215	0.198
世帯収入				0.409	0.236	0.215
学校外教育支出					0.297	0.215
国語学力						0.602

注) すべて1%水準で有意。

表2-11 国語通過率(全設問)を従属変数とする重回帰分析

	非標準化係数 B	標準化係数 β	有意確率
(定数)	40.327		
母学歴	3.679	0.164	0.000***
父職業	1.680	0.090	0.000***
学校外教育支出	1.581	0.198	0.000***
R	0.336		
決定係数(調整済みR ² 乗)	0.112		

注) *** p<.001、** p<.01、* p<.05。

表2-12 算数通過率(全設問)を従属変数とする重回帰分析

	非標準化係数 B	標準化係数 β	有意確率
(定数)	39.579		
母学歴	3.736	0.141	0.000***
父職業	2.184	0.100	0.000***
学校外教育支出	1.171	0.124	0.000***
R	0.269		
決定係数(調整済みR ² 乗)	0.071		

注) *** p<.001、** p<.01、* p<.05。

2) 保護者対象アンケートに基づく分析

① 全体

次に、階層指標に子どもの性別や保護者の意識や行動に関する変数を加え、学力（正答率）を従属変数とした重回帰分析を行うことにする。独立変数に関しては、これまでの先行研究（苅谷・志水編 2004、お茶の水女子大学 2007、耳塚 2007 等）、学力との相関、多重共線性の問題回避などの観点から総合的に判断して変数選択を行った¹。

重回帰分析を行った結果が、表 2-13（従属変数：国語および算数の正答率）である。国語に関しては、父職業以外のすべての変数が学力に対して有意な影響を及ぼしている。この結果から、階層変数を統制しても、家に

は本がたくさんあることや、小さいころ絵本の読み聞かせをしたこと、毎日朝食を食べさせていること、テレビゲームで遊ぶ時間を限定していることなどが国語の正答率にプラスの影響を及ぼしていることがわかる。一方、算数に関しては母学歴、父職業、学校外教育支出がすべて有意になる一方、男子ダミー、学歴期待、「家には本がたくさんある」「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」の影響が有意でなくなる。算数の場合は、小さいころ絵本の読み聞かせをしたこと、毎日朝食を食べさせていることが、階層変数を統制しても有意な影響を与えていることがわかる。決定係数は、国語では0.257、算数では0.175と、国語のほうが高くなっている。

表 2-13 通過率（全設問）を従属変数とする重回帰分析（保護者調査）

	国語		算数	
	β	有意確率	β	有意確率
母学歴	0.060	0.011*	0.070	0.005**
父職業	0.026	0.244	0.052	0.030*
学校外教育支出	0.119	0.000***	0.051	0.038*
男子ダミー	-0.132	0.000***	-0.020	0.370
学歴期待	0.161	0.014*	0.036	0.165
子どもにとってほしい成績	0.287	0.000***	0.299	0.000***
家には本がたくさんある	0.080	0.000***	0.013	0.597
子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	0.049	0.033*	0.051	0.034*
毎日朝食を食べさせている	0.080	0.000***	0.050	0.024*
テレビゲームで遊ぶ時間は限定している	0.074	0.001**	0.042	0.064
調整済みR ² 乗	0.257		0.175	

注) *** p < .001、** p < .01、* p < .05。

1 表 2-13、14で示した変数については以下のようにした。「子どもにとってほしい成績」は、「上のほう」（5点）から「下のほう」（1点）を、「家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある」「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「毎日子どもに朝食を食べさせている」「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」には、「とてもあてはまる」（4点）から「まったくあてはまらない」（1点）を与えた。

② 地域別

次に、結果を地域別に見たのが表2-14である。大都市、町村部について、国語・算数の正答率を従属変数とした重回帰分析の結果を示している。これを見ると、大都市と町村部では、有意な影響を与えている変数、決定係数とも異なっていることがわかる。例えば、大都市では国語、算数とも学校外教育支出や毎日朝食を食べさせていることが有意な影響を及ぼしているのに対し、町村部ではそのような傾向は見られない。決定係数は大都市のほうが高く、町村部では低くなっている。すなわち、町村部においては、ここにあげた変数以外の要因が学力に強く働いていることが示唆される。

3) 児童対象アンケートに基づく分析

① 全体

次に、児童を対象としたアンケートの結果に基づき、階層、学校外教育支出に子どもの性別、子どもの意識や行動に関する変数を加え、分析を行う。ここでも、前項と同様の手法で変数の選択を行い²、重回帰分析を行った(表2-15)。国語、算数とも、通塾「学習塾に行っている」と「宿題をする」「わからない言葉が出てきたときは辞書を使う」といった家庭学習、「家の人はスポーツ新聞を読む」といった家庭の文化環境は、学力に有意な影響を及ぼしている。国語に関しては男子ダミー、テレビ視聴時間以外の変数が学力に対して有意な影響を及ぼしてお

表2-14 通過率(全設問)を従属変数とする重回帰分析(保護者調査、地域別)

	大都市				町村部			
	国語		算数		国語		算数	
	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率
母学歴	0.040	0.300	0.091	0.024	0.080	0.085	0.073	0.127
父職業	0.018	0.616	0.013	0.729	-0.014	0.759	0.051	0.267
学校外教育支出	0.197	0.000	0.102	0.015	0.019	0.668	0.074	0.100
男子ダミー	-0.077	0.029	0.039	0.293	-0.141	0.001	-0.052	0.214
学歴期待	-0.021	0.610	-0.034	0.423	0.059	0.234	0.039	0.445
子どもにとってほしい成績	0.297	0.000	0.292	0.000	0.263	0.000	0.270	0.000
家には本がたくさんある	0.084	0.029	-0.008	0.843	0.133	0.002	0.005	0.918
子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	0.055	0.156	0.091	0.025	0.034	0.429	0.034	0.438
毎日朝食を食べさせている	0.107	0.002	0.080	0.030	0.061	0.132	0.024	0.569
テレビゲームで遊ぶ時間は限定している	0.065	0.072	0.045	0.231	0.097	0.019	0.029	0.491
調整済みR ² 乗	0.261		0.173		0.185		0.134	

注) 網かけは5%水準で有意であることを示す。

2 表2-15、16で示した変数については以下のようにした。家での勉強時間については、「ほとんどしない」(1点)、「30分くらい」(2点)、「1時間くらい」(3点)、「2時間くらい」(4点)、「3時間くらい」(5点)、「3時間以上」(6点)を与えた。テレビ視聴時間については、それとは逆に「3時間以上」(1点)から「ほとんど見ない」(6点)を与えた。「学校の宿題をする」「(マンガ以外の)本を読む」「わからない言葉が出てきたときは辞書を使う」については、「よくしている」(4点)から「まったくしていない」(1点)を、「学習塾へ行っている」については「行っている」に1点、「行っていない」に0点を、そして、「家の人はスポーツ新聞を読む」については「あてはまる」(3点)から「あてはまらない」(1点)を与えた。

表2-15 通過率（全設問）を従属変数とする重回帰分析（児童調査）

	国語		算数	
	β	有意確率	β	有意確率
母学歴	0.136	0.000***	0.123	0.000***
父職業	0.058	0.023*	0.085	0.002**
学校外教育支出	0.076	0.013*	0.049	0.129
男子ダミー	-0.042	0.080	0.031	0.227
勉強時間	0.055	0.046*	0.105	0.599
テレビ視聴時間	-0.020	0.424	0.019	0.456
進学希望	0.097	0.000***	0.082	0.003**
宿題をする	0.178	0.000***	0.176	0.000***
（マンガ以外の）本を読む	0.102	0.000***	0.022	0.399
学習塾に行っている	0.112	0.000***	0.067	0.034*
わからない言葉が出てきたときは辞書を使う	0.065	0.009**	0.086	0.001***
家の人はスポーツ新聞を読む	-0.118	0.000***	-0.071	0.004***
調整済みR ² 乗	0.230		0.129	

注) *** p<.001、** p<.01、* p<.05。

り、算数よりも決定係数は高いことがわかる。

② 地域別

次に、児童を対象にしたアンケートからの回帰分析を地域別に見てみよう。表2-16は、大都市および町村部について、国語・算数の正答率を従属変数とした重回帰分析の結果を示している。これを見てまず注目されるのは、決定係数が大都市と町村部で大きく異なることである。大都市では国語0.238、算数0.161の調整済みR²乗値が、町村部ではそれぞれ0.137、0.076にすぎない。町村部での決定係数の低さは、先ほどの保護者票に基づく分析と同様、ここで示した独立変数以外の要因が町村部では影響力が強いことを示唆している。

大都市では学習塾への通塾が有意な影響を与えているが、町村部ではそのような傾向は見られない。これに関しては、町村部では学習塾への通塾が少ないことが関係しているも

のと思われる。標準偏回帰係数（ β ）に注目すると、町村部は大都市よりも「宿題をする」の値が大きい。大都市では「宿題をする」の β 値は国語で0.096、算数で0.145なのに対し、町村部では国語で0.228、算数で0.146といずれも高い数値を示している。これらの結果は、町村部は大都市に比べ、通塾よりも家庭で宿題をすることが学力に強く影響していることを示唆している。

■ 4. おわりに

本章では、保護者および児童対象の調査結果から、家庭環境、家庭での生活、親の意識や行動と子どもの学力との関係を調べた。その結果、家庭環境、家庭での生活や学習が学力とどのように関係しているのか、具体的に把握することができた。また、保護者の意識や行動に関しては、保護者調査の主な回答者

表2-16 通過率（全設問）を従属変数とする重回帰分析（児童調査、地域別）

	大都市				町村部			
	国語		算数		国語		算数	
	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率
母学歴	0.079	0.066	0.156	0.000	0.151	0.003	0.071	0.172
父職業	0.057	0.162	0.041	0.339	0.017	0.728	0.097	0.057
学校外教育支出	0.099	0.079	0.071	0.228	0.032	0.515	0.095	0.060
男子タミー	-0.018	0.649	0.063	0.131	-0.069	0.145	-0.011	0.817
勉強時間	0.070	0.172	-0.005	0.930	-0.018	0.705	0.038	0.448
テレビ視聴時間	-0.065	0.129	-0.021	0.632	0.011	0.820	0.058	0.240
進学希望	0.141	0.001	0.106	0.021	0.059	0.223	0.074	0.140
宿題をする	0.096	0.018	0.145	0.001	0.228	0.000	0.146	0.003
（マンガ以外の）本を読む	0.125	0.002	0.006	0.885	0.050	0.294	0.011	0.824
学習塾に行っている	0.134	0.019	0.117	0.049	0.058	0.212	-0.065	0.180
わからない言葉が出てきたときは辞書を使う	0.010	0.820	0.111	0.012	0.062	0.214	0.056	0.276
家の人はスポーツ新聞を読む	-0.112	0.004	-0.069	0.086	-0.129	0.005	-0.087	0.067
調整済みR ² 乗	0.238		0.161		0.137		0.076	

注) 網かけは5%水準で有意であることを示す。

である母親の学歴との関係が強いことが明らかになった。「階層」→「家庭環境・生活」→「学力」といった影響関係があることを示唆する結果が確認できたといえよう。しかしその一方で、重回帰分析の結果、母学歴や父職業といった階層変数を統制しても、親の子どもへの働きかけや子どもの家庭学習は学力に有意な影響を及ぼしていることも明らかになった。階層とは独立に学力に影響する変数

の発見は、学力格差問題に対して示唆するところが大きく、今後もさらなる研究が必要であろう。また、地域別の重回帰分析でも見られたように、町村部においては一貫して決定係数が低く、本章が採用したモデルの当てはまりがよくない。これは、地域によって学力の規定要因が異なることを示しており、特に町村部での学力向上策を考える上で課題を残しているといえよう。

●参考文献

- Heyneman, S. P. & Loxley, W. A. 1983 “The Effect of Primary-School Quality on Academic Achievement across Twenty-nine High- and Low-Income Countries.” *American Journal of Sociology*, 88(6), pp.1162-1194
- 荻谷剛彦、志水宏吉編 2004 『学力の社会学』岩波書店
- 荻谷剛彦 2008 『学力と階層 教育の綻びをどう修正するか』朝日新聞出版
- 耳塚寛明 2007 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集、23-39頁
- Nonoyama-Tarumi, Y. 2008 “Cross-National Estimates of the Effects of Family Background on Student Achievement: A Sensitivity Analysis.” *International Review of Education* 54 (1), pp.57-82
- お茶の水女子大学 2007 『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究』JELS第10集